

ルカによる福音書10章1-24節 「新たな宣教地へ」

1A 宣教者として 1-16

1B 宣教の招き 1-16

1C 受け入れる者たち 1-9

2C 拒む者たち 10-16

2B 宣教の報告 17-24

1C 天における名 17-20

2C 父の示される啓示 21-24

2A 献身者として 25-42

1B 隣人への助け 25-37

1C 律法 25-28

2C 良きサマリヤ人 29-37

2B 御言葉の傾注 38-42

本文

ルカによる福音書 10 章を開いてください、私たちは前回、イエス様がエルサレムに顔を向けて歩き始めたところから見ていきました。私たちはこれから、19 章までエルサレムに行かれるまでの宣教の働きを読んでいきます。

1A 宣教者として 1-16

1B 宣教の招き 1-16

1C 受け入れる者たち 1-9

10:1 その後、主は、別に七十人を定め、ご自分が行くつもりすべての町や村へ、ふたりずつ先にお遣わしになった。

「その後」とありますが、イエス様は三人の弟子の候補生と話をされた後のことです。まだイエス様についていく心備えができていなかった人々でした。その後に、イエス様は「別に七十人を定め」られたとあります。別に、というのはお選びになった十二人のことです。なぜ七十人なのか、旧約時代に、神はイスラエルを十二部族に分け、さらに七十人の長老がモーセのところにおりました(出エジプト 24:1)。そして、「ふたりずつ」遣わしておられます。この方式は、使徒の働きにもありますね、ペテロは一人ではなくヨハネと共に、パウロは一人ではなくバルナバと共に行きました。先日、公園で伝道しましたが、一人の姉妹と共に私は動きました。彼女は教会案内のチラシを配るのがとても上手で、私は質問をしてきた人に答えるようにしました。(あまり質問する人はいませんが。)こうやって、チームで動くというのは主の御心ではないかと思えます。

ところで、「遣わす」という言葉は「使徒する」と訳すことのできる言葉です。使徒というのは、「遣わされた者」ということです。ですから、ここに使徒の働きの原型がありますし、私たちの福音宣教の原則を知ることができます。イエス様は、「ご自分が行くつもりすべての町や村へ」彼らを遣わされました。遣わすのはイエスご自身であり、私たちが自分で願っていくではありません。ですから、アンティオケの教会では、指導者たちが祈りと断食に専念して、聖霊による預言の言葉によって、バルナバとパウロを遣わします。

10:2 そして、彼らに言われた。「実りは多いが、働き手が少ない。だから、収穫の主に、収穫のために働き手を送ってくださるよう祈りなさい。

イエス様は、七十人の者たちに対してこのことを言われました。初めのガリラヤ宣教においては十二人の弟子たちだけということですが、イエス様は七十人に増やされて、それでも足りないと言われています。私たちは常に、この挑戦を受けています。働き人が足りないのです。そして、それを祈りなさいと言われているのですから、祈っていく必要がありますね。

10:3 さあ、行きなさい。いいですか。わたしがあなたがたを遣わすのは、狼の中に小羊を送り出すようなものです。

これは何か？ 宣教に遣わされるのは、敵対的なところに遣わされるということです。福音を伝えて、「ありがとうございます、本当にイエス様はすばらしいです。」と快く受け入れられるものではない、ということです。十字架のことばは、ユダヤ人にはつまずきであり、ギリシヤ人には愚かなものであると使徒パウロが言いました。福音を聞いて、信じて受け入れるとすれば、それは神がその人をご自身に引き寄せられるからであり、そうでなければつまずいたり、あざ笑うのです。

10:4 財布も旅行袋も持たず、くつもはかずに行きなさい。だれにも、道であいさつしてはいけません。10:5 どんな家にはいっても、まず、『この家に平安があるように。』と言いなさい。10:6 もしそこに平安の子がいたら、あなたがたの祈った平安は、その人の上にとどまります。だが、もしないなら、その平安はあなたがたに返って来ます。

「くつもはかずに」とありますが、「くつも持たずに」と訳したほうがよいでしょう。つまりスペアの靴は用意しないように、ということです。ここでの原則は、「身軽でいなさい、また目的に集中しなさい。」ということでもあります。私たちは海外宣教に行く時に、しばしば観光に誘われます。けれども、興味が出ません。確かに美しい景観のある場所が近いのですが、それでも行く気がしません。それは、目的があるからです。それから、家に入っていきます。今と違って、旅人はもてなす習慣があるので、その習慣の中で福音を伝えます。そして、「平安」というのは、基本的に自分たちを受け入れ、また福音を受け入れる人々のことです。大事なものは、拒む人たちもいることです。けれども、自分に平安が戻ってくること、つまり拒まれることによってそれを自分のせいだと全く思わなくてよ

い、ということです。福音を語ったこと、神の御心を行ったことで、充足を得られるということです。

10:7 その家に泊まっていて、出してくれる物を飲み食いしなさい。働く者が報酬を受けるのは、当然だからです。家から家へと渡り歩いてはいけません。10:8 どの町にはいっても、あなたがたを受け入れてくれたら、出される物を食べなさい。10:9 そして、その町の病人を直し、彼らに、『神の国が、あなたがたに近づいた。』と言いなさい。

主が宣教の働きをする時に、生きるのに必要なものは備えてくださいます。「家から家へと渡り歩いてはいけません。」というのは、今で言うならば資金集めをしなくてよい、ということです。そうではなく、導かれるところで主がその時に備えてくださいます。「働く者が報酬を受けるのは、当然だから」という言葉があります。これは使徒も、繰り返し強調していたことです。しかし、パウロ自身は天幕作りをしていました。彼は、家々を回ってだまし取っている悪い偽教師たちがいたので、彼らにつまずきを与えないために、自らの手で働きました。けれども原則は、イエス様の言われたように働く者が報酬を得るのは当然、ということになります。

イエス様が繰り返されているのは、「出される物を食べなさい。」ということです。今でも思い出すのは、メキシコ系アメリカ人の牧師さんが日本に宣教にいらした時に、刺身の生物が並んで、「イエスの御名によって食べます。」と目をつむりながら食べたという話です。そうですね、そこに出たものを選び好みせず食べます。そして、癒しを行いながら、神の国を言い広めます。

2C 拒む者たち 10-16

10:10 しかし、町にはいっても、人々があなたがたを受け入れないならば、大通りに出て、こう言いなさい。10:11 『私たちは足についたこの町のちりも、あなたがたにぬぐい捨てて行きます。しかし、神の国が近づいたことは承知していなさい。』

これを実際に使徒パウロが行いました、口汚くののしるユダヤ人たちに対して、この言葉を話しました(使徒 13:44-52)。足のちりを払い落す行為は、福音を語るという務めがあることを示しています。福音を受け入れないのであれば、神の裁きがその人に下ります。しかし、福音を伝えないのであれば、災いに遭うという切迫感がパウロたちにはありました。それは基本的に、預言者たちが神から与えられていた使命と同じでした。

10:12 あなたがたに言うが、その日には、その町よりもソドムのほうがまだ罰が軽いのです。10:13 ああコラジン。ああベツサイダ。おまえたちの間に起こった力あるわざが、もしもツロとシドンでなされたのだったら、彼らはどうの昔に荒布をまとい、灰の中にすわって、悔い改めていただろう。10:14 しかし、さばきの日には、そのツロとシドンのほうが、まだおまえたちより罰が軽いのだ。10:15 カペナウム。どうしておまえが天に上げられることがありえよう。ハデスにまで落とされるのだ。

イエス様は、全く異邦人の町々であり、そして退廃しきっていたソドムとゴモラを取り上げて、ガリラヤの町々のほうが罰の重いことを語られています。ここは、私たちはいつも気をつけなければ、いけないことです。神を度外視した人々、例えば教会に足を一度も運ばなかった人がことさらに重い罪を背負い、教会に足を運んだ人は軽い罪で済む、と考えがちです。いいえ、もし福音に応答しないのであれば後者のほうが、罰が重いのです。これらの町々はユダヤ人のそれであり、神から啓示が与えられており、知られていることについて神に応答する責任があります。私たちは、神に知らされたことについてのみ責任が課せられます。多く知った者は、多く任されるのです。

10:16 あなたがたに耳を傾ける者は、わたしに耳を傾ける者であり、あなたがたを拒む者は、わたしを拒む者です。わたしを拒む者は、わたしを遣わされた方を拒む者です。」

福音宣教において、いつも知らなければいけないことです。以前も学びましたが、私たちはちょうど警察官のような存在です。自分自身には権威はないです、けれども権威がキリストから賦与されて、その権威によって人々をキリストへと導きます。警察官はその制服があるので、何トンもするトラックを制止することができます。ですから、福音を語る時に、その反応に対して私たちは個人的に受けとめる必要はありません。受け入れる時は、自分の伝え方がすばらしかったからではなく、キリストをその人が受け入れたのです。そして拒む時は、自分を拒んだのではなくキリストを拒んだのです。

2B 宣教の報告 17-24

1C 天における名 17-20

10:17 さて、七十人が喜んで帰って来て、こう言った。「主よ。あなたの御名を使うと、悪霊どもでさえ、私たちに服従します。」10:18 イエスは言われた。「わたしが見ていると、サタンが、いなずまのように天から落ちました。10:19 確かに、わたしは、あなたがたに、蛇やさそりを踏みつけ、敵のあらゆる力に打ち勝つ権威を授けたのです。だから、あなたがたに害を加えるものは何一つありません。10:20 だがしかし、悪霊どもがあなたがたに服従するからといって、喜んではなりません。ただあなたがたの名が天に書きしるされていることを喜びなさい。」

七十人たちがイエス様のところに戻ってきました。そして主が付託された権威によって、悪霊どもが服従したことを喜んで報告しています。これは大切ですね、宣教報告です。使徒パウロは、決して一匹狼ではありませんでした。アンティオケの教会から遣わされ、そして戻ってきてバルナバとともに主の恵みを報告しました。同じように、エルサレムで会議が行われた時も、彼らに異邦人の中に働く神の恵みを分かち合いました。そしてイエス様が、七十人にとつもない権威を与えておられたことがここで分かります。空中において、激しい霊的戦闘が繰り広げられていたようです。そして、「蛇やさそりを踏みつけ」という表現は、創世記3章15節に出てくるメシヤ預言に通じるものです。悪魔は蛇によってエバを惑わしました。その頭を女の子孫、メシヤが踏みつけます。キリストにあって弟子たちもサタンも悪霊どもも踏みつけます。

そこから大事なことを主は語られます。10章全体の主題にもつながります。「だがしかし、悪霊どもがあなたがたに服従するからといって、喜んではなりません。ただあなたがたの名が天に書きしるされていることを喜びなさい。」宣教の働きで大きな御業が現われたことは、喜ばしいことです。けれども、もっと大切なのはどこにあるか、常に確かめる必要があるのは、天に名が書き記されていることです。これは、自分が確かに救われていること、御国の市民になっていることの保障であります。黙示録20章には、最後の審判で神が、数々の書物をお持ちで、いのちの書もあれば、行ないの書もあります。いのちの書に名を書き記されていれば、新しいエルサレムに入ることができます。

私たちは、神が自分に対して与えておられる大きな働きと、自分自身が神とどのようなつながりなのかを分けなければいけません。神に用いられているからといって、神と良い関係にあるかどうかは分からないのです。「その日には、大ぜいの者がわたしに言うでしょう。『主よ、主よ。私たちはあなたの名によって預言をし、あなたの名によって悪霊を追い出し、あなたの名によって奇蹟をたくさん行なったではありませんか。』しかし、その時、わたしは彼らにこう宣告します。『わたしはあなたがたを全然知らない。不法をなす者ども。わたしから離れて行け。』(マタイ 7:22-23)」預言も行ない、悪霊も追い出して、奇蹟も行なっているのに、イエス様とは人格的な関わりがなかった、ということです。大事なものは、父なる神とキリストにあって交わっているのかどうか、ということです。

2C 父の示される啓示 21-24

10:21 ちょうどこのとき、イエスは、聖霊によって喜びにあふれて言われた。「天地の主であられる父よ。あなたをほめたたえます。これらのことを、賢い者や知恵のある者には隠して、幼子たちに現わしてくださいました。そうです、父よ。これがみこころにかなったことでした。10:22 すべてのものが、わたしの父から、わたしに渡されています。それで、子がだれであるかは、父のほかには知る者がありません。また父がだれであるかは、子と、子が父を知らせようと心に定めた人たちのほかは、だれも知る者がありません。」

イエス様が聖霊に満たされています。そして父なる神を賛美しています。その内容は、幼子たちのようなものたちに、ご自身を示されたということです。ここに、七十人の弟子たちと父なる神との関係が記されています。子のように、神に信頼しているということです。このような純粋で、素直な人々に神が啓示してくださるのです。私たち人間は、知識というのは自分で学習するものだと思います。けれども聖書は違います。聖書は聖霊によって書かれました、霊的な書物です。したがって、聖霊によってのみ理解することができます。必要なものは、イエスを主としていること、キリストとしていること、すると聖霊が私たちに神の真理を悟らせてくださいます。

10:23 それからイエスは、弟子たちのほうに向いて、ひそかに言われた。「あなたがたの見ていることを見る目は幸いです。10:24 あなたがたに言いますが、多くの預言者や王たちがあなたがた

の見ていることを見たいと願ったのに、見られなかったのです。また、あなたがたの聞いていることを聞きたいと願ったのに、聞けなかったのです。」

旧約聖書の預言者のことを、羨ましくならないでしょうか？主の使いに会ってみたり、夢の中に、幻の中で会ってみたり、神との生きた出会いがあるのに、自分たちはどうなのか？と思われるかもしれません。しかし、イエス様は「あなたがたのほうが幸いなのです。預言者たちが羨んでいたものなのです。」ということです。王たちも、ダニエル書によれば、神はご計画を持っておられて王を立てて、また倒されます。彼らはこれからの世界がどうなるかを知りたがっているのに、知ることができません。けれども、イエスの弟子ということは、その特権が与えられているのです。この方が、神の啓示の完成であるからです。神の本質の完全な現われだからです。ですから、聖書の最後の書物の題名は、「イエス・キリストの黙示」あるいは啓示なのです。この方の現われによって、これまで預言者が示されても悟ることができなかったものが、見えているのです。

2A 献身者として 25-42

1B 隣人への助け 25-37

1C 律法 25-28

10:25 すると、ある律法の専門家が立ち上がり、イエスをためそうとして言った。「先生。何をしたら永遠のいのちを自分のものとして受けることができるでしょうか。」10:26 イエスは言われた。「律法には、何と書いてありますか。あなたはどの読んでいますか。」10:27 すると彼は答えて言った。「『心を尽くし、思いを尽くし、力を尽くし、知性を尽くして、あなたの神である主を愛せよ。』また『あなたの隣人をあなた自身のように愛せよ。』とあります。」10:28 イエスは言われた。「そのとおりです。それを実行しなさい。そうすれば、いのちを得ます。」

この律法の専門家は、イエス様が弟子たちに語られていた、「あなたがたは、見ていて、聞いているから幸いです。」という言葉聞いて、話しています。なぜなら、「賢い者や知恵のある者には隠して」とイエス様が父なる神に祈られたからです。そこで、律法についての専門としていますから、そんなことを祈られるイエスを試している訳です。

永遠のいのちについて彼は尋ねました。イエス様は、律法の中で最も大切な掟として挙げられた二つの戒めを取り上げます。そして、彼は適確に答えます。それでイエスの答えは、「そのとおりです。それを実行しなさい。そうすれば、いのちを得ます。」であります。これでは、一見、律法の行ないによって救われ、永遠のいのちを得るというように聞こえます。けれども、実はそうではありません。ここでイエス様が、試してくる律法学者に気づいてほしかったのは、「実行しなさい」ということなのです。律法について議論だけして、その命令の中に生きていないという点をお語りになりたかったのです。私たちキリスト者の中でも、そのことは起こります。これこれはいけな！と口角泡を飛ばして話しますが、ではその悪いことに対して、福音をもってどう対応しているのかその適用が見られないことです。

2C 良きサマリヤ人 29-37

10:29 しかし彼は、自分の正しさを示そうとしてイエスに言った。「では、私の隣人とは、だれのことですか。」

この律法の専門家は、自分が隣人に対して愛の行為をしていると誇示したかったようです。そこで次の話をイエス様が行われます。有名な「良きサマリヤ人」の話です。

10:30 イエスは答えて言われた。「ある人が、エルサレムからエリコへ下る道で、強盗に襲われた。強盗どもは、その人の着物をはぎとり、なぐりつけ、半殺しにして逃げて行った。

ここは、エルサレムからエリコに下る道です。死海またヨルダン川に向けて、一気に降下して、世界でもっとも低い陸地である、ヨルダン溪谷へと進みます。そこである人が強盗に襲われます。ここでの前提は、襲われた人はユダヤ人です。

10:31 たまたま、祭司がひとり、その道を下って来たが、彼を見ると、反対側を通り過ぎて行った。

10:32 同じようにレビ人も、その場所に来て彼を見ると、反対側を通り過ぎて行った。

彼らは神殿礼拝での奉仕から、帰宅している最中だったのでしょう。ここの箇所について、イスラエル旅行のガイドは、超正統派のユダヤ教徒も似た感じのところがあり、律法を守ることで頭がいっぱいで、周りにあるものが目に入らないのだそうです。

10:33 ところが、あるサマリヤ人が、旅の途中、そこに来合わせ、彼を見てかわいそうに思い、

10:34 近寄って傷にオリーブ油とぶどう酒を注いで、ほうたいをし、自分の家畜に乗せて宿屋に連れて行き、介抱してやった。10:35 次の日、彼はデナリ二つを取り出し、宿屋の主人に渡して言った。『介抱してあげてください。もっと費用がかかったら、私が帰りに払います。』

—デナリが一日分の労賃なので、今でいうと二万円ぐらいなのでしょう？

10:36 この三人の中でだれが、強盗に襲われた者の隣人になったと思いますか。」10:37 彼は言った。「その人にあわれみをかけてやった人です。」するとイエスは言われた。「あなたも行って同じようにしなさい。」

ここでイエス様は何を言いたかったのでしょうか？これは、単に「良い行ないをしなさい」という良い話ではありません。そうではなく、福音そのものです。一つ目、イエス様がサマリヤ人を例に出しているということです。サマリヤ人が、この半殺しになったユダヤ人の隣人となり、サマリヤ人にとって彼が隣人でした。ユダヤ人とサマリヤ人は犬猿の仲です。ですから、イエス様はこの律法学

者の自分の義を粉碎されたのです。それから、ここでサマリア人は誰かと言いますと、イエス様はご自身を投影されているということです。なぜわかるのか？33 節の「かわいそうに思い」という言葉は、福音書ではイエス様がかわいそうに思い、他の人々に何かをしてあげる時に使われている言葉であり、他の人の行動ではなくイエス様の行動に使われているのです。

したがって、もし私たちがここを「良いサマリア人のようにならないといけない」という道徳的なこととして受けとめたら、それは律法の専門家と同じ理解になってしまいます。むしろ、自分にはまるでそのようなことをする義を持っていない、自分は罪深い、何もできないという貧しさ、心の貧しさが出てこないといけないのです。それから、キリストこそがこの行いを持っておられるということです。ですから、イエスがキリストであることを信じ、受け入れて、この方に拠りすがっていくこと、付いていくことによるのみ、このサマリア人と同じことをすることができます。ボンヘッフアーという牧師がいった言葉が至言です。「**人間的な愛は、自分自身のために他者を愛し、霊的な愛はキリストのために他者を愛する。**」東日本大震災でも、多くのボランティアが行き増したが、クリスチャンではない人たちの中には数多く、自分探しのために行きました。しかし、キリスト者は、キリストがそうされているから行きますということです。

そして、すでにキリストの弟子となっている人々に対しては、助けていくのはごちない人々、自分の生活スタイルを崩すような人々、そうした人々に関心を寄せ、時間を取るということをするチャレンジがあります。例えば、以前、ヒッピーたちが怒涛のごとく教会に押し寄せた、カルバリーチャペル・コストメサがあります。その教会は保守的なところで、牧師も教会員もスーツを着ていました。ところが、長髪で、お風呂も入っていないくて、裸足で動いているヒッピーたちが中に入ってきます。けれども、教会の人たちは彼らに仕えたのです。また、彼らのために祈り始めた、チャック・スミスの奥さんケイもすごいです。彼女は彼らのために、祈り始めました。チャックは、「ヒッピーに必要なのは祈りではなく、シャワーだ。」というぐらいに思っていました。彼女が祈るのでいっしょに祈ったのです。

2B 御言葉の傾注 38-42

10:38 さて、彼らが旅を続けているうち、イエスがある村にはいられると、マルタという女が喜んで家にお迎えした。

マルタ、マリヤ、そしてラザロの家です。ベタニヤにあります。エリコからエルサレムに上る道、エルサレムに近いところにこの町があります。イエス様は、この三人と親愛な仲になっておられました。彼らもイエス様を愛して、そしてイエス様も彼らを愛しておられました。

10:39 彼女にマリヤという妹がいたが、主の足もとにすわって、みことばに聞き入っていた。10:40 ところが、マルタは、いろいろとてなしのために気が落ち着かず、みもとに来て言った。「主よ。妹が私だけにおもてなしをさせているのを、何ともお思いにならないのでしょうか。私の手伝いをする

ように、妹におっしゃってください。」10:41 主は答えて言われた。「マルタ、マルタ。あなたは、いろいろなことを心配して、気を使っています。10:42 しかし、どうしても必要なことはわずかです。いや、一つだけです。マリヤはその良いほうを選んだのです。彼女からそれを取り上げてはいけません。」

ここで大切な点は何でしょうか？マルタがイエス様のためにもてなしをしていたことは、悪いことではありません。そうではなく、優先順位が崩れてしまったことです。イエス様のところで御言葉を聞くこと、これが最優先であるのですが、彼女はイエス様のために動いているようで、イエス様に対してその最優先のことをしているマリヤのことを詰った、ここに問題があります。ここに奉仕の重要な点があります。それは、主との交わり、互いの交わり、そのつながりがあってこそその奉仕だということです。教会の中で喜んで主に仕えたい、という思いは高尚です。それは、大きな祝福です。マルタも、主を愛していました。けれども、それを行わない人々がいる時に、羨んだり、いらしたり、思い煩いを増やすならそれは御心から外れています。ですから、主との交わりと、互いの交わりがあって、そこにある愛に駆り立てられて動いているかどうか、そこが大事です。何をするか、何を言うかではなく、そこに自分がいる、主のご臨在の中に、また交わりというものの中に自分がいる、それが大事なのです。

こうやって見てみますと、10章は一つのテーマがあります。七十人が遣わされて、宣教の働きをするとき、そこには大きな業を主は行ってくださいますが、あくまでも天に名が書き記されていることを喜んでのこと。そして、その中で父なる神が私たちにご自身を示してくださること。それから、キリスト者として良い行ない、憐みの行ないをする時は、あくまでも自分ではなくキリストご自身にしがみついて、この方のゆえに行なうこと。そして、最後は御言葉を聞いてイエス様をあがめていることです。これが、十二人から七十人へと宣教の働きが広がった時の、イエス様が教えたかったエッセンスであります。